

V. 特記事項

1. 基礎教育センター

「数的処理Ⅰ・Ⅱ」は「統計数字の意味を考える」ことに主眼を置いており、今日のようにデータサイエンスの重要性が認識される以前からデータサイエンスの導入教育を行ってきた。特に実測データを利用した教材は本教科の大きな特徴をなすものであり、大学教育学会やその分科会からも注目されてきた。近い将来全学横断的にデータサイエンス教育を行う場合は本教科が導入部分を受け持つ可能性が大きい。

情報メディア学科では令和2(2020)年度から「特化型AIの企画提案と企画書作成」を「日本語力」のテーマにしている。「日本語力Ⅰ」でまずAIの基本について学んだ後、「日本語力Ⅱ」で企画提案と企画書作成を行う。「日本語力Ⅰ」では文献資料の正確な読解、「日本語力Ⅱ」では説明文の書き方、プレゼンテーション力の強化を目指している。日本語力の方針に沿うものである。AIの企画提案は4~5人のグループ単位で行い、企画書の作成も同グループで行う。情報メディア学科の専門性に配慮したテーマを与えることで学生の学修意欲を喚起し、活発な議論を通してコミュニケーション力の向上を図ることができている。提案された企画のなかには産業界で今まさに開発中のものや近い将来研究開発が本格化しそうなものもあり、「日本語力」の枠を超えた教育成果が期待できそうである。

健康栄養学科やフードビジネス学科の学生にもAIの利用を身近に感じさせるような具体的な事例を示すことができれば「日本語力Ⅰ・Ⅱ」をAIの導入教育に役立てることは可能であると考えている。

2. 図書情報センター

令和2(2020)年度においては、年度当初から新型コロナウイルス感染症への対応が必要となった。特に緊急事態宣言下における遠隔授業においては、平成26(2014)年度から全学的に導入し、令和元(2019)年度からは教務システムと連動させているLMS(Learning Management System)を中核に据えることにした。学生にはLMSにアクセスするように指示を一本化することで、すべての授業で混乱を招くことなく、授業コンテンツへアクセスすることが可能となった。また、教員にとっては、LMSが教務システムと連動し、全授業が自動登録されるため、登録漏れのリスクを心配することなく、コンテンツ作成に集中することができた。

なお、リアルタイム遠隔授業のツールであるウェブコミュニケーションソフト(以下、ソフトと言う。)について4月末までに各教員にて利用登録がなされ、活用されていることが確認された。そのため、5月以降も継続して利用ができるように、図書情報センターに於いてライセンス契約を行った。さらに学生を含め、導入済みのSingle Sign-On環境にソフトを対応させた。そのため学生、教員ともに、普段学内で利用しているIDとパスワードの組み合わせを用いて、ソフトにもログインできるようになり、利用時の混乱を避けることができた。その他、遠隔授業を安定稼働させるため運用上の調整を行った。

遠隔授業に関連して、各種サーバ機器、ネットワーク機器の利用は、設定時の想定を大きく超える利用がなされており、令和3(2021)年度以降もネットワークの増速、サーバ機器のディスク増設等の検討を行い、学生の学修支援を安定提供できる体制を構築した。